教科書 Q&A

鉄砲伝来年

解説 関 周一

鉄砲伝来年の諸説について、具体的に解説してください。

鉄砲伝来年は、現在、1542年説と1543年説（従来からの通説）とがある。

ポルトガル人の日本初来や、鉄砲伝来に関する基本的な史料は、次の4点である。

【ヨーロッパ史料】
〔史料1〕エスカランテ（スペイン人）が、ディオゴ＝デ＝フレイタス（ポルトガル人）から入手した情報（岸野久『西欧人の日本発見』吉川弘文館、1989年に所収）
〔史料2〕ポルトガル人アントーニオ＝ガルヴァン『諸国新旧発見記』（1563年刊行）

【日本史料】
〔史料3〕文之玄昌（ぶんしげんしょう）『鉄炮記』（慶安2〈1649〉年成立の『南浦文集』や『種子島家譜』巻四〈鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料』旧記雑録拾遺、家わけ四、鹿児島県、1994年に所収〉）

【中国明代の史料】
〔史料4〕鄭舜功『日本一鑑』窮河話海、巻二、器用条

それぞれについて簡単に内容を紹介しておこう。

〔史料1〕の内容は次の通りである。フレイタスと一緒にシャムにいたなかの、ポルトガル人2人がチナ（中国）沿岸で商売しようと、1隻のジャンク船で向かった。だが暴風雨にあってレキオス（琉球）のある島へ漂着した。そこで彼らはその島々の国王から手厚いもてなしを受けた。その後、ほかのポルトガル商人たちもチナのジャンク船に乗って再びそこへ行った。今回は上陸を許されず、商品および値段覚書と、対価の銀とを交換した。

〔史料2〕は、〔史料1〕と同一の情報をもとにして、推測や未確認情報を排したものと考えられる。同書の内容は、次の通りである。1542年、ディオゴ＝デ＝フレイタスが、暹羅（シャム）国ドドラ市において、一船のカピタンであった時、その船より3人のポルトガル人が一艘のジャンク船に乗って脱走し、シナ（中国）に向かった。彼らの名はアントーニオ＝ダ＝モッタ、フランシスコ＝ゼイモト、アントーニオ＝ペイショットという。北緯30度余に位置するリャンポー（双嶼。中国人密貿易商すなわち後期倭寇の拠点）市へ入港することを目的としていたが、後ろより大きな暴風雨に襲われ、彼らを陸より隔てた。数日して、東の方32度の位置に一島がみえた。人がジャポンエスと称し、古書にその財宝について語り伝えるジパンガスであるようだ。この諸島は、黄金・銀その他の財宝を有している。

〔史料3〕は、もっとも著名なものだが、『鉄炮記』編纂の時期が、慶長11（1606）年に下ることや、編纂の動機が種子島時堯の鉄炮入手を記念して、孫の久時が顕彰の意を込めて書かせたものであることに留意する必要がある。

「天文癸卯（天文12〈1543〉年）秋八月二十五丁酉」、種子島の西村という小浦に、船客百余人を乗せた大船が入港した。そのなかに大明儒生五峯（後期倭寇の頭目である王直）がいた。西村をおさめていた織部丞は、砂の上に文字を書いて、五峯との間で筆談

をした。織部丞は、乗船している客は、どこの国の人かを尋ねた。五峯は、彼らを「西南蛮種の賈胡(ここ)」(ポルトガルの商人)と説明した。

織部丞の指示で、船は、島主の種子島時堯がいる赤尾木の港に入った。「賈胡の長」2人は、鉄砲を持参していた。2人の名は、「牟良叔舎」と「喜利志多佗孟太」である。通説では、〔**史料2**〕の人名と対照させて、「牟良叔舎」はフランシスコ、「佗孟太」はモッタの音訳と解されている。

彼らは、種子島時堯の目の前で、鉄砲を使用してみせた。鉄砲は鉛玉を、火薬を使って発射するもので、的を岸畔におき、身をおさめて目を眇(すがめ)にして、百発百中で的を撃った。時堯は、高額な鉄砲2挺を購入して「家珍」とし、家臣の篠川小四郎に火薬の調合の仕方を学ばせた。さらに時堯は、「鉄匠」(刀鍛冶であろう)数人に、鉄砲の鍛造を命じた。その結果、外形はよく似たものができたものの、底を塞ぐ技術(尾栓の製法。とくに雌ネジを切る技術)がなかった。

翌年、「蛮種の賈胡」が、種子島の熊野浦に来航した。「賈胡」のなかに「鉄匠」が1人いた。そこで時堯は、矢板金兵衛尉清定に、底を塞ぐ技術を学ばせた。その修得には時間がかかったが、1年余りののち、「数十の鉄炮」を製造することができた。

〔**史料4**〕の著者の鄭舜功は、明の新安郡の人で、嘉靖35(1556)年に来日して豊後国(大友氏の領国)に滞在した。『日本一鑑』は、その見聞にもとづいて撰述された日本研究書である。同書は、「手銃」について、初め「仏郎機国」(ポルトガル)より出て、「国の商人」(中国の商人、すなわち後期倭寇)が始めて「種島(種子島)の夷」に伝えてつくったものである、と説明している。

以上をみていくと、ヨーロッパ史料の〔**史料1**〕〔**史料2**〕は、ポルトガル人の来航を述べるのみで、鉄砲に関する記述はない。種子島への鉄砲およびその生産技術の伝来を述べているのは〔**史料3**〕〔**史料4**〕である。また年次は〔**史料2**〕が1542年、〔**史料3**〕が天文12(1543)年とある。通説の1543年は、〔**史料3**〕に依拠している。

〔**史料1**〕は同じ島に2度、〔**史料3**〕は種子島に2度、ポルトガル人が来航している。これまで、ヨーロッパ史料と『鉄炮記』の2度の来航は同一のものだと考えられてきた。

清水紘一は、『種子島家譜』には、禰寝重長の種子島侵攻事件と鉄砲伝来とが同年であるという歴史的記憶が反映されているとし、『島津貴久記』が前者を天文11(1542)年としていることから、鉄砲伝来は天文11年とした(清水紘一『織豊政権とキリシタン』岩田書院、2001年)。

村井章介は、関連史料の検討を踏まえて〔**史料2**〕と〔**史料3**〕との関係を吟味し、〔**史料3**〕の年次を1年前にずらし、天文11年としても、史料間に矛盾はないとした(村井章介『世界史のなかの戦国日本』筑摩書房、2012年。同『日本中世境界史論』岩波書店、2013年)。

教科書『新日本史　改訂版』(山川出版社、2018年)は、清水・村井説に依拠して、「ポルトガル人の交易は、初めは海禁政策をとる明から正式に認められなかったため、彼らは中国人密貿易商と組み、アジアの交易ルートに乗って日本に至った。鉄砲を伝えたとされるポルトガル人は、おそらく1542(天文11)年、シャム(タイ)から中国人密貿易商の王直の船に乗って種子島に着いたものとみられる」(p.142～143)と説明している(「おそらく……とみられる」と表現していることに留意)。また「1606(慶長11)年に種子島氏の依頼でまとめられた『鉄炮記』に拠って、これを1543(天文12)年のこととする説もある」(p.143)と注記している。

これに対して、中島楽章は、〔**史料1**〕〔**史料2**〕と〔**史料3**〕とは異なるできごとを述べていると考える。前述した「牟良叔舎」をフランシスコの音訳とするのはかなり疑わしく、またモッタは一般的な姓であり、それをもって同一人物とみなすとは難しいという。そしてレキオスすなわち琉球に1542年・1543年の2度来航し、後者がそののちに種子島に来航し(1543年)、1544年に再度種子島に来航したと解している(中島楽章「ポルトガル人の日本初来航と東アジア海域交易」〈『史淵』第142輯、2005年〉。同「ポルトガル人日本初来航再論」〈『史淵』第146輯、2009年〉。同『大航海時代の海域アジアと琉球』〈思文閣出版、2020年〉など)。

以上、鉄砲伝来年の諸説は、異なる地域の史料相互の分析によって提起されているのである。

(せき・しゅういち／宮崎大学教育学部教授)